

『虞美人草』 黜られる教師

Junko Higasa 2013.11.16

『虞美人草』で黜られるのは藤尾である。だがこの「黜り」で『吾輩は猫である』に共通点を見出す。『猫』と『虞美人草』は「無絃の琴」「義経」「鉄」ローマの詩や戯曲と、話題の共通事項が多いが、「黜り」について一回転半ひねってみると、黜りは「男が女を」「女が男を」ばかりとは限らず「金満家が教師を」というパターンも浮かんでくる。『虞美人草』第十二章で、藤尾が男に「わん」と言えと重ねて要求する性格であるという描写を見て、落雲館の生徒が苦沙弥先生に「わん」と言えという場面が浮かんできた。ここで「黜られる者」は、昔の女から当世の男女に転じる。「脆き者は女」その女と同じように弱きはずの男子たちが東大を出て官僚にならなかった同性教師をバカにする時代。それは金儲けが優先されるルサンチマン時代である。「車屋と教師はどちらが偉いのだろう」世は目先の金儲けを是とし、人間の将来を正しく導く教育を非とする。産業発展に力を注ぎ、人間形成を軽く見る。その結果、男を黜る女（藤尾）は一人、苦沙弥先生を黜る男子生徒は集団。文字通り情けない話である。しかも金持ち女一人が博士（教育者）になる小野さんを黜り、教育を受ける者が集団で教師を黜っていたのでは、どう考えても世の中が賢い方向へ進むとは思えない。確かに学者は金儲けがヘタである。しかし金儲けばかりが高じると、金と命の奪い合いしか起こらない。